

自己実現の時代と「学力論争」

センター協力研究員（品川区立中延小学校校長） 重松清文

「学力低下」をめぐってさまざまな議論が展開されてきました。学力低下を危惧する論者が、2002年度から実施された学校五日制や新教育課程を正面から批判したこともあってか、学力低下論を批判する論者は、学校五日制や新教育課程がめざしている「生きる力」の育成の必要性を力説するといった対決の構図が続いているように思います。

しかしながら、学力低下を危惧している論者が示しているデータの中には、真摯に受け止めて、克服の施策を「政策的なレベル」「教育・心理学のレベル」「授業（指導）体制・方法のレベル」「教育実践のレベル」「学校と家庭教育の連携のレベル」等々で議論を深めていきたい課題も多く提起されていたように思います。

「政策レベル」の問題としては、適正な学級規模の実現や学校あるいは学級の「学力実態」に応じた授業支援の在り方（少人数授業、習熟度別授業、個別指導などティーチングサポート）がもっと真剣に検討されるべきであると考えます。また、「学級の荒れ」への対応や教師の指導力サポートなどの問題を考えると、アメリカの一部の学校で試みられている「スクールカウンセラー」や「カリキュラムコーディネーター」の学校配置など、教職員スタッフの在り方も新しい課題（子どもの多様化、学習内容のスリム化に伴う知の再構成化など）に対応して拡充されてもよいのではないかと考えます。

それぞれのレベルで問題を吟味することは、生涯学習を視野に置いた「生きる力」の育成の条件を整備していく上でも生産的な議論の枠組みをつくっていくことになるでしょう。中でも私が期待していることは、「教育・心理学のレベル」での議論の深化です。

2002年12月のセンターシンポジウムにおけるまとめの言葉で汐見先生がふれられたことですが、「受験という競争動機を超える新しい学習動機」にかかわる問題です。

荻谷先生等による学力実態調査で、「中学数学については、学力の2コブ化が見られる」「通塾の有無による学力格差は、拡大傾向にある」との指摘がありますが、この

ような実態の中で「2コブ化」の前コブ群に位置している子どもたちを支えている「学習動機」が生涯の成長と学びの志を支えているかと言えば、危ういと言わざるを得ません。

雑誌「とらば一ゆ」の編集長である河野純子氏は、『『いい大学に行くため』という理由だけでは誰も勉強しなくなりました。勉強していい大学に入り、いい会社に就職し、それで本当に幸せかといえばそうでもない。幸せの構造が崩れていますから、勉強や就職も幸せに無関係という状態です。そんな中で、若者に学びや働く意味をどのように伝えていくかが大人の責任なのです』『では、なぜ自分の適職ややりたいこと、夢、目標が持てないのか。一つの原因として目標となるモデルと出会えていないことが挙げられます』と述べています。「なりたい自分像」に向かって「そうなれるために学ぶ」自律的な学習の動機付けが求められているのではないのでしょうか。受験の動機付けを強化して学習の「復権」を主張している論者もいますが、果たしてそうした動機付けは、生涯学習社会と自己実現の時代にふさわしい教育的な価値のある学習動機論と言えるのでしょうか。

2002年度から新設された「総合的な学習の時間」は、環境・福祉・国際理解など21世紀の課題に「人」を介してアプローチする学習です。幸せの価値やモデルとなる人との出会いが探究過程に埋め込まれている学習と言えるでしょう。キャリア教育と重なる学習もあります。私は、この総合的な学習の時間がもつであろう教育的な価値について、教育学・心理学の立場からの発信を期待しています。

総合的な学習は、「経験カリキュラム」に近いものです。体験重視の学習と「教科カリキュラム」とを関連付け、構造化して豊かな学びを構成していくこと。「なりたい自己像」の探究と「なれる学力」を支援・保障していくこと。それが、「教育実践のレベル」で学力低下問題を克服しようとしている私の課題であろうと考えています。